

台湾の原住民の村を訪ねて（山田）

## 台湾の原住民の村を訪ねて

山 田 英 美

### まえがき

台湾は、正式名称は中華民国・台湾で、総面積約36,000km<sup>2</sup>、人口約2,300万人の小さな島であるが、かつて戦略的に各国から注目されていた。沖縄県の西表島や与那国島とは目と鼻の先にあり、日清戦争後より半世紀もの間日本の植民地となったわけだが、第二次大戦後は日本人にとって近くて遠い国の一つとなった。日本統治から解放された台湾は、兄貴分の中国に反発して自己主張をし続ける気骨のあるところを見せてきた。そのため、中国本土とは長らく兄弟げんかのような反目関係となり、中国政府が『弟分の台湾と仲良くした者は本国に入るべからず』といった御触れを出したりしたために、中国に入国する必要がある場合は台湾には近付けなかった日本人が多かった。私もその理由で今日まで台湾というところを知らなかった。国立民族学博物館の代表創建者でありモンゴルをはじめ世界を股にかけて調査研究した文化人類学者、故梅棹忠夫氏が、享年90歳で2010年7月に亡くなる最晩年の日々にも『まだ行ったことのない場所がたくさんあるんだ』と言っておられたというのが、台湾もその一つだったそうである。

国立民族学博物館友の会が企画した『台湾東部の原住民族を訪ねる旅』（引率講師は国立民族博物館准教授・野林厚志氏）に参加し、私が初めて台湾を訪ねたのは2011年3月半ばにさしかかるころであった。日本の東北地方太平洋沖に大地震発生のニュースを一日遅れでその地で聞いた。台東での、主としてプユマ族、パイワン族の生活文化のおもしろさに酔って

## 台湾の原住民の村を訪ねて（山田）

た気分にもいっぺんに翳がさしたが、離れていればじたばたしてもはじまらないと表面上は冷静に構えて、予定されていた行程を皆と精力的に見聞してまわった。

ここに報告するのは、台湾原住民の存在と今を生きるその生活について見聞したものの抄録である。今回の旅程は4日間というごく短いものであったため、印象に残ったトピックスをランダムに拾って、まとめることにする。

### 身分としての原住民族

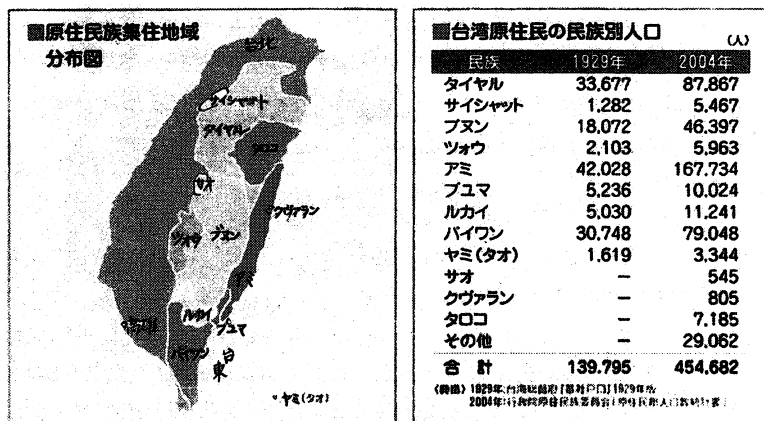
台湾原住民族とは、漢族系の住民よりも古くから台湾島ならびにその周辺の島嶼部に居住してきたオーストロネシア系先住民の総称である。日本統治時代には高砂族<sup>たかまごぞく</sup>と呼ばれていた人々である<sup>1)</sup>。原住民族が台湾全土で占める割合が現在2%（漢系民族が98%）にすぎないにもかかわらず、少数民族の文化がよく保存されていることに驚く。生活している村は美しく、都市部をはじめ各地に原住民文化を保存展示・体験できる博物館や部族のセンターなどの施設も充実している。為政者によって翻弄されてきた台湾の歴史の中で、原住民文化が固有の状態を保ち続けることができたのは、中国と台湾の政治的対立とは距離を置きながら社会の中に位置づけられていたことと、台湾政府が、これら少数民族の持つ多彩な固有の文化を、対外的にアピールできる国の財産として、政策的にも意識していることがその背景にある。そして原住民も政治的利益をうまく活用して生活している（たとえば高等教育を受ける際に別枠で受験できるとか、特別の福利の対象とされているなど。もちろん投票権もある）といえる。

個人が『身分としての原住民族』に入るか入らないかは自由に選択できるとのことであるが、2001年に施行された『原住民身分法』によって規定された身分を獲得した彼らは、原住民族であることにアイデンティティと

台湾の原住民の村を訪ねて（山田）

誇りをもって生涯をおくるといふ。身分法の規定によると、大きくは山地原住民と平地原住民に分けられる。現在は14部族を数えるが、平地に居住してきたプーマ族やアミ族は知識層の人たちを排出している。

図（1）、表（1）は、原住民の集住分布図と民族別人口である<sup>2)</sup>。



よくわかる台湾資料展より(国立民族学博物館・2006年)

図（1）、表（1）野林厚志<sup>2)</sup>より

案内書<sup>3)</sup>の説明によると、各部族の特徴は次のとおりである。

- ・タイヤル族：北部台湾に広く居住し、アミ族に次いで人口が多く、顔の刺青と織物工芸で有名。
- ・サイシャット族：竹管とハト麦で作った独特の楽器をつかう矮霊祭<sup>こびと</sup>で知られる。
- ・ブヌン族：南部および東部台湾に広く居住する。輪になって歌う合唱「八部合音」が世界的に有名。
- ・ツォウ族：部落は阿里山にあり、服装は狩の獲物の皮で作られ、男性は羽根飾りの皮の帽子をかぶっている。

台湾の原住民の村を訪ねて（山田）

- ・アミ族：母系社会で台湾原住民の中でも人口が最も多い民族。印象的なリズムの歌に合わせた軽快な踊りで有名。
- ・ブユマ族：青年元服の儀礼の祭り（猴祭）があり、少年の度胸と刻苦勉勵の精神を養うことを主旨としている。
- ・ルカイ族：民族創生の神話が豊富で、百合の花と百歩蛇を敬愛している。
- ・パイワン族：芸術を愛し、独自の美感をもつ。華麗な民族衣装と細やかな彫刻で知られている。
- ・ヤミ（タオ）族：自称タオ族。生活環境が独立し、もっとも「漢化」を免れている。女子の頭髮の舞、男子の勇士の舞が有名。
- ・サオ族：祖先が白鹿を追って日月潭に住みついたという伝説をもつ。杵を楽器とした歌舞は有名。
- ・クヴァラン族：宜蘭平原から花蓮一帯に移り住んだ。バナナの繊維で編んだ工芸品が特色。
- ・タロコ族：先祖を崇拜し、遺訓を守る。伝統的な考えから、男子には狩りを、女子には布織りを奨励している。
- ・＜その他＞・セデック族：元はタイヤル族に属していたが、文化的な背景が異なることから正式にセデック族を名乗っている。霧社事件で有名。
- ・サキザヤ族：1878年の清兵への反乱事件から、民族の滅亡を恐れて130年間姓を隠していたが、最近これを復活させた。

エスニック・グループ間をつなぐ言葉は？

それぞれの文化の中核をなすのは、衣食住、儀礼・祀りごとのあり方のほかには何ととっても独自の言語であるが、かつて民族独自の言葉はほかの部族の人々にはほとんど理解できなかった。では共通の言葉は何だろう

か。標準的な中国語か台湾語かと思うが、これはそういう教育を受けないと習得できない。

なんと、長いあいだ彼らの間の意思疎通を可能にした言葉は『日本語』だということであり、私たちが訪れたプユマの村でも、年配の人たちは冗談を言うくらいに上手に日本語を話すことができる人たちであった。

表（１）に見る、タイヤル（泰雅）からヤミまたはタオ（雅美または達悟）までの九族が基本的な民族集団であるという考え方が、50年続いた日本統治時代の後半から台湾社会に受容されてきたということと同時に、大正８年に日本政府がまず着手したことが、台湾全土に小学校を92校開設することであり、各地で原住民にも徹底した日本語での教育をしたことが知られていることなどが、その事情を物語る。

ただ、第二次世界大戦後には事情は一変し、普通語（台湾語）を話すことと漢字で書かれた文章を読むことが要求された。歴史の中で困難な生き方を余儀なくされてきたことは、原住民族の人々も例外ではない。

### プユマ族の人々の歓迎

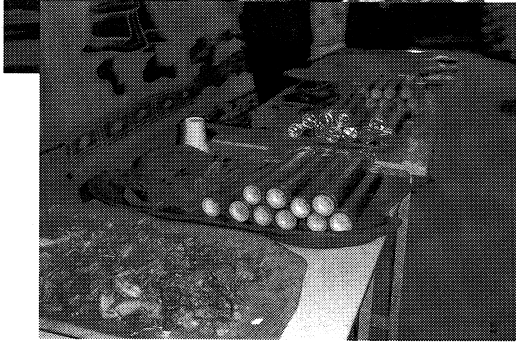
プユマの人たちの民族衣装は、いずれの年齢層のものも多彩な色彩にいろどられており、女性は70歳以上者と未満者でブラウスやスカートの基調になる色が違っているので、衣装を見ると年齢層や性別、身分などがわかるようになっている。帽子の周りを彩る髪飾りも男女ともにカラフルである 写真（１）。歓迎の集いでは、独自の刺繍をほどこしたそろいの衣装で腕を組んで唄いながら、次々と踊りの披露があり、いよいよ食事の段となつてからも、長老が列の先頭に立ち、「チュ・チュ」とねずみか鳥のような独特の摩擦音を発して、手にした枝葉に含ませた酒を振り撒きながら、食前の感謝の祈りを天の神と地の神と祖先に長々とささげてから、やっと始まった。

### 台湾の原住民の村を訪ねて（山田）

ごちそうは、山の中にいる大きなネズミ、すずめくらいの野鴨、カタツムリ（タニシのような食感）、猪肉の野菜炒め、種々の自家産生野菜、竹に詰めて蒸したご飯、月桃の葉でくるんで蒸した粟ちまき（中の餡に肉や野菜）、<sup>りやんう</sup>蓮霧というベル型のさくさくした果物、なんとも表現できない味の地酒など、ボリューム満点のすばらしいおもてし料理だった 写真（2）。『スマララン！（プユマ語でありがとう！）』



写真（1）  
プユマ族  
中高齢者男女の正装



写真（2）  
プユマ族伝統のごちそう

### パイワン族の工芸品

トンボ玉、刺繍、ビーズ手芸、木彫りなどの手工芸品で知られているパイワンの人々は手先が器用で、手仕事にこめるパイワン族の想いが形としてあらわされている。陳利友妹という芸術家は、女優として映画に出演したこともある銀髪の堂々とした女性で、刺繍の大きな作品や小物類を精力的に作り続け、土産品として販売する店も開いている 写真（3）。ここで

台湾の原住民の村を訪ねて（山田）

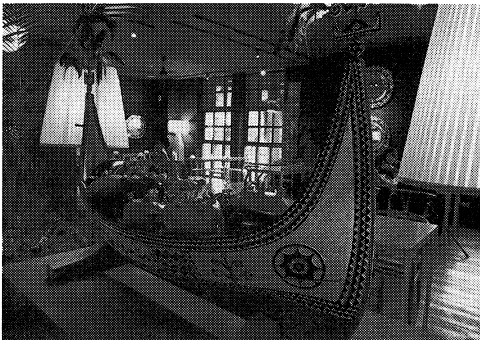
も臼のように大きな木のお櫃に、ほかほか炊いたおこわを山のように入れて振舞ってくださった。スケールの大きさには目を見はらされる。



写真（3）  
制作中のタペストリーを見せるパイワン族の陳利友妹さん

### アミ族の美しい船

装飾が施された木の船は、ほんとうに美しい。赤い船底部と白いペンキの船体には赤と黒の文様が絶妙なバランスで描かれている。同じものは二つと無いが、どの船にも胴体とせりあがった船頭船尾に同じ円形の文様が必ず描かれる。『目』を表しているという。レストランなどでは地元の採れたて野菜を盛って、レイアウトにも使っていて、風情をかもしている写真（4）。



写真（4）  
アミ族の船に野菜を盛ったレストラン

## プユマ族男子のイニシエーション

私たちが最初に訪ねたプユマ族の村では、上述したように民族衣装で身をつつんだ人たちの伝統の歌や踊りやごちそうで大歓迎を受け、まるで竜宮城に行った浦島太郎さながらであったが、私が強く興味を惹かれたのは、今も使われている集会所（青年の通過儀礼に使われる家）の存在であった。

写真（5）は、森を背にした原っぱの中に建っている集会所の一つである。藁葺きの屋根、急な梯子段に続く扉のない入り口のほかは、周囲をまるく囲った丸太の荒い壁には窓も無い。部外者が内部を見ることは禁じられていて覗くことはできないが、おそらく、薄暗いがらんだ空間のみがあるではなかろうかと想像した。かなり高さのある高床が、この家に入ることが俗世間と絶縁することを象徴している。12歳から18歳の青年期の男の子がここに集まり、悪いことをするとイラクサのむしろの上に転がされたり、叩かれたりする、という。また、18歳から21歳の男性は別の小屋に移り、裸になって訓練を受ける。この体験の影響としては年齢内の結束が固くなる。といった説明が、しつこく質問して得た回答だった。プユマ族男性の独自のイニシエーションの形であるらしいが、ほかの種族にはないのか、集会所へは通いなのか、どれくらいの期間という決まりはあるの



写真（5）  
プユマ族の青年集会所  
（通過儀礼の行われる家）



台湾の原住民の村を訪ねて（山田）

か、女性は何か別の形でおこなうのかどうか……、疑問質問は次々と出てくるが、この通過儀礼体験者がそのときいなかったこともあり、それ以上の知見を得ることはできず……文化人類学を学びなおして自ら調査研究するのがよろしかろうという結論を自分でくださった、もし可能なら。

## 首 狩 族

蘭嶼という島を居住地にしているヤミ（タオ）族は首狩をしないが、他の原住民族は部族間で境界線をめぐるような争いのあったときには、相手側の者の首を狩って決着をつける風習があった。特に北部の方でケンカばやい部族があったようである。それで外部者は「首狩族」という呼び方で、薄気味悪さや怖れをいだくのであるが、彼らもむやみに殺戮をするわけではない。また、それらの生首は、後でねんごろに葬って供養をしたということである。

この首狩（獵首）を、呉鳳郷という人が身をもってやめさせたと語り継がれている。したがって今は、首狩は伝説の世界のことである。

## 人々の宗教・信仰

台湾の人々の三大関心事は、宗教・信仰、政治、教育であるという。『関心』は行動としての『熱心』を導く。

原住民族は、もともとはアニミズム的信仰の体系をもつ。先祖の霊とも親しい感情を持っている。ヤミ（タオ）族だけはそれとは異なり、アニト信仰と呼ばれるオバケや霊を信じ、死者はすぐ墓に運んで、運んだ人は清めの式をきちっとするという。おそらく儀式に使われたと思うが、悪霊と戦うための武器や、椰子の皮とか籐で編んだ帽子や鎧が、博物館に展示されていた。かれらは祖先を祀ることはしない。

キリスト教布教の定着は、山岳地域にかたよっているようである。たと

台湾の原住民の村を訪ねて（山田）

えば台東県にあるパイワン族集落にあるキリスト教会などは、信仰のための場所だけではなく、診療所を併設していたり、子どもたちの学習塾や村人のコミュニケーションの場としても機能しているので、親しんでいくうちに改宗する人も出てくるわけである。一方、都市部ではいろんな宗教が好き嫌いなく、熱心に信仰されているという現象が見られる。

台北市には有名な龍山寺がある 写真（6）。龍山寺は何宗のお寺ですか？と尋ねてみたところ、うーん仏さまが何宗でもない、それより裏へ回ってごらんさい、とガイドさんに言われ、人ごみをかき分けて本殿の裏側へ行ってみると、そこには道教の神々の祠がアパートのようにずらりと並んでいる。それぞれの祠の前で跪いて熱心に祈りをささげている善男善女で沸きかえっている。道教の神々は『医の神』『学問の神』『水の神』『海の神』『商売の神』『縁結びの神』などなどで……ちなみに『縁結びの神』のところでは、小さなビニール袋に入った赤い糸をぐるぐる巻いたものが並べてある。それをいただいてバッグなどに入れておくと良縁がある（やも）という。ところで『赤い糸』をいただくためにはお賽銭などを出さねばいけないのではないかとときろきよろして見るが、賽銭箱のようなものは見当たらない。すると、ここの神さまは『後払い』で、ご利益があった



写真（6）龍山寺

写真（7）木製の聖筭（おみくじをひくときのうらない用具）

#### 台湾の原住民の村を訪ねて（山田）

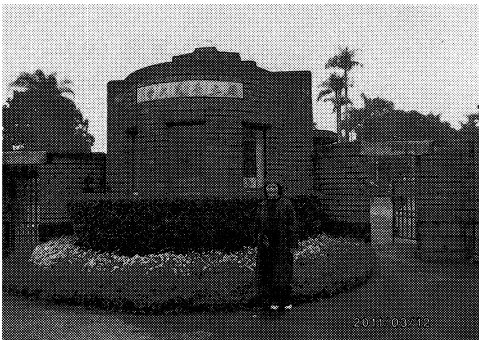
らお賽銭をくださいということになっていると説明してくれた人がいたので、たいへん気に入った。一つをいただいてきたが、あげようと思った人にあげ忘れてまだ手元にある。もっともらってきて誰彼にあげたかったなと思うが、後の祭りである。

こうした、人々が現世のことを願う道教の神々と、来世を祈る仏さまの両者を擁してその寺廟は龍山寺と呼ばれ、24時間オープンしているので、悩みごとがあれば即お寺にお参りに来るから、若い人たちの自殺者が少ないという。また、自分が持ってきたお供えは持ち帰ってもよいが、他人さまの供え物は持ち帰ってはいけない、残ってあふれかえった供物は失業者などに配布されるというから、ここでは宗教や信心は、人々の生活を支えている現実的な生活の道であるのだろう 写真（7）。

#### 教育にまつわること

台湾の人々は教育熱心である。ガイドの呉さんが、「ここの通りを『親不孝通り』といいます。」と台北駅前通りを指差した。見ると、駅から続く道路の両側に学習塾の看板が重なるように連なっている。日本、韓国などと同様、ここでも教育産業が盛んである。

台北市には国立台湾大学がある 写真（8）。日本で七番目の帝国大学と



写真（8）  
国立台湾大学表門にて

### 台湾の原住民の村を訪ねて（山田）

して日本統治時代に設立された台北帝国大学がその前身である。全島に分布する台湾大学のキャンパスの総面積は台湾の面積の百分の一を占めるそうである。この立派な大学に入るのはたいへんな狭き門であるから、親は苦勞して子どもを塾に通わせ、高等教育をつけさせようとがんばる。原住民は、すでに触れたように別枠で受験できるという特権が与えられているので、優秀な子弟はチャンスが多くなる。

台北の国立台湾大学の旧総図書館だった建物が、2005年より『校史館』と呼ばれるすばらしい大学博物館に改装された。数多くの常設展示の中に、人類学展示館においては原住民族の文化資料が美しい形で保存されている。「台湾の博物館の展示は、のびやかで遊びがあり、自由に見られる。」と、野林講師は高く評価しておられた。

### 昔 ベトナムとのつながりは？

台東の発掘現場に案内された。「台東駅をつくるときに地面を掘ったところ、スレート石材でできた箱型石棺が続々1,600個以上も出土した」と説明を受けた。現在も発掘調査が続けられている 写真（9）、（10）。BC 1,000年の遺跡から出土する遺物が、ベトナムの遺跡から発掘されるものと共通したところがあると、専門家が言っているという。ベトナムと台湾



写真（9）  
発掘された石棺

台湾の原住民の村を訪ねて（山田）



写真（10）

毎日続けられる発掘作業

の前史時代のつながりは？ 好奇心があらたな刺激をうける。

### 台湾はコンビニ天国

空模様があやしいが、うっかり雨具を持ってくるのを忘れた、そんなことをつぶやいていると、「傘ならコンビニで買えますよ。」と教えてくれた人がいた。台湾のコンビニに傘など売っているのかなあと、いぶかりながら入ってみると、いろんな物があふれんばかりに並べてあって驚いた。人口当たりのコンビニ店舗密度は世界一だというから、更に驚く。中でもセブンイレブンがなじみの色と形の看板をあちこちに挙げており、それを眼にすると安心な心持ちとがっかり感が入りまじった。

日本であまり見ないコンビニ店内の風景としては、入り口に近い場所の窓際にカウンター式のテーブルと椅子がしつらえてあり、体格のよい若者たちがラーメンか何かをすすっているのが、おもしろかった。そっとカメラをむけさせてもらった 写真（11）。

### 使われている通貨は？

渡航前に県内の銀行で両替しようとしたところ、「通貨は台湾ドルですが、当行ではその扱いがありません。」ということだった。レートは1台

台湾の原住民の村を訪ねて（山田）



写真 (11)  
コンビニ店内に設けられて  
いるカウンター

湾ドル×3が、およその日本円である。現地に着いて品物の価格表記を見ると、『\* \* 圓』『\* \* 元』などと同じ棚にもいろいろある。店の人にたずねると、「元も圓も台湾ドルも、全く同じです。」と、なんだかよく分からない返事であった。500ml のペットボトルの水が70円弱なので、日本にくらべると物価は安い。

さらに、面白いことがあった。ほとんどの店ではレシートをくれる。こまかい漢字のような文字が並んでいるレシートは、印字が荒くてさっぱり分からないのだが、上の部分にアルファベット2文字と8桁の番号が印刷されている 写真 (12)。この部分の印字は鮮明である。ガイドの呉さんは、

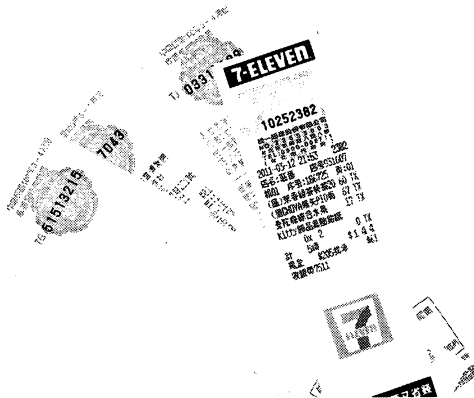


写真 (12)  
くじつきレシート

#### 台湾の原住民の村を訪ねて（山田）

50代の上背のある紳士で、よくわかる日本語を話したいへんな知識人だった。こちらが知りたいことを余すところなく説明してくれる。彼いわく、「台湾人はレシートを捨てずにかならず保管しておきます。なぜなら、この数字がくじ引きになっていて、2ヵ月に1回全国で抽選があり、当たったら現金に換えることができるから。」これはなかなかのアイデアではなかろうか。紙幣と引き換えにどんどんたまってゴミになるだけのレシートに、貨幣価値を含ませるのだから。私は手持ちのレシートを探して全部呉さんに差し上げることにした。せめてものお礼の気持ちで。

#### あとがき

駆け足の旅ではあったが、その文化の空気の中に一步踏み入れることで、映像などで知る間接的な知識とは次元の異なる知見・体験が与えられる。まして単なる名所観光やショッピングなどではない、目的をきちっと定めた旅であれば、短くても充実感が違う。しかし、駆け足のデメリットは当然ある。誤解していることもきっとあるだろう。見ていないところや聴いていないことももちろんたくさんある。だから、こんなにいろいろ喋っていいのだろうか、と多少はうしろめたい。

台北市の街路を歩いていたら、面白いものに出会った。あの日光東照宮で我々にも親しい三猿の、こちらは素朴な石の彫刻だった。ただし台湾のそれは『みザル』『きかザル』『いわザル』に、もう一つあって、『せザル』と両手をうしろにやって、ぼかんと上を向いて立っているかわいらしいサルだった。つまらないことはしない、余計なことはしない。ああいいなあ。

#### 引用・参考文献

- 1) 野林厚志「今を生きる台湾の人々」千里文化財団 季刊『民俗学』137号 2011年 pp. 3-56

台湾の原住民の村を訪ねて（山田）

- 2) 野林厚志 [台湾頭部の原住民族を訪ねるーパイワン続・ブユマ族の村へ]  
第77回民族学研修の旅 参考資料
- 3) 台湾交通部観光局 パンフレット「台湾原住民部落の旅」